

# 風立ちぬ

風の街の中学校の窓から

庄内町立立川中学校  
学校便り  
2017.10.31

文責：校長 佐藤 真哉

## 齋藤清先輩に学ぶ (11/25) 「夢と希望を持って」講演会開催!

11月25日(14:15~16:20)立川中学校体育館を会場に、**齋藤清先輩**(立川中学校出身、全日本卓球選手権大会8度優勝、通算勝利数最多101勝)の講演会「**夢と希望を持って**」を開催します。

私が5月に行われた「田川地区春季卓球大会」を訪れた際、初めてお会いしました。その後連絡を取り、後輩のために講演を依頼したところ快諾していただきました。当日は、講師紹介 DVD・文化祭全校合唱の上映、講演、卓球試技(代表生徒ペアが全日本チャンピオンに卓球でチャレンジ)、お礼の全校合唱(「校歌」「最上川舟唄」「群青)」、全生徒・教職員の記念写真撮影が行われます。**授業参観と合わせて多数ご来校下さい!**

齋藤清先輩について紹介します。\*「**齋藤清の楽しい卓球**」より抜粋

ぼくが卓球への道を歩むことになったことを説明するには、ぼくの生まれ育った環境を紹介するのが1番の近道です。

ぼくは昭和37年9月30日、**山形県東田川郡立川町清川**で生まれました。県の西北部、最上川と立谷沢川との合流点にある水と緑に恵まれた山村です。両親は建物が関係の仕事に従事していたためひとりで遊ぶことが多く、特に機械じりが好きでした。小学校での好きな学科は理科と算数で、なかでも物理の実験が好きでした。学校が終わると友達と野球、水泳の川遊び、山歩きで山菜採りや栗拾い、自転車を取り回すなど自然に接する毎日でした。運動は何でも好きでしたが、かけっこの時は特に速いということはなく、ふつうの少年でした。運動神経が優れていたということはないように記憶しています。

たまたまスキーが得意でいつも優勝していましたが、回転、滑降、距離など、どの種目でも負けるという親に長い重たいものを着せられたことがありました。大きくなってからは、スキー選手になるという夢を捨てたことがありません。今思えば、卓球との出会いは小学校4年の時、冬の週末だけ週1回あった卓球クラブでラケットを握りました。グリップは初めはシェイクハンドでしたが、なんという理由もなく、すぐペンホルダーになりました。初めて試合に出た時は1年上の先輩に敗れました。その時は特にくやしいという気持ちもなく、本格的に卓球をやろうという気持ちはありませんでした。その後、夏はソフトボール、水泳、冬はスキーにあけられて、卓球との縁も進んではありませんでした。そして、**昭和50年に立川中学校に進みました。**家から学校まではバスで20分の距離でした。はじめは、柔道部か野球部に入りたい、なにしろカツ

コいいスポーツをやりたいと思っていました。しかし、ここでぼくの人生を決めた卓球との縁が生まれました。小学校時代、ぼくにスキーを教えてくれた**齋藤二三さん**(現立川中学校卓球部地域指導者)に**卓球部入り**を勧められ、4月末入部しました。この頃の立川中学校の卓球部は顧問の**金丸武夫先生**の熱心な指導で県優勝を目指していました。この**金丸先生と齋藤さん**、さらに**志田博志さん**との出会いが、**齋藤清の運命**を決定づけました。しかし、中学校の卓球部の新米1年坊主にはその後の人生を知るよしもありません。いよいよ、ぼくの卓球人生のスタートです。ぼくの歩んできた道がそのまま、この本を読んでくれる、**未来のチャンピオン**を目指す君たちに役に立つと思います。



